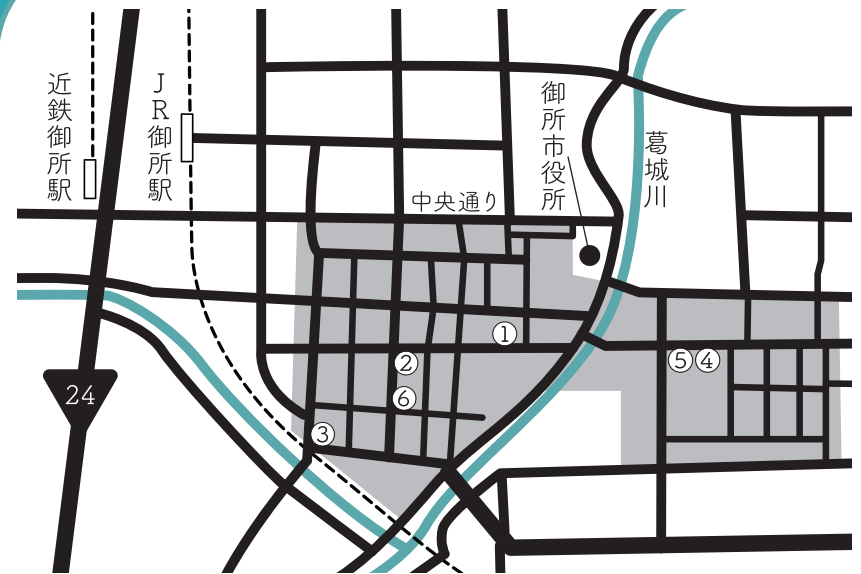


御所まち 町家と暮らしを 探る

GOSEMACHI MAP



本誌で紹介している町家

- ① 赤塚家 ② 吉村家 ③ さくら茶屋
- ④ 梅本家 ⑤ 中尾家 ⑥ 旧高島理容室

※建物内部の一般公開はしていません。見学は外観のみとなります。

御所まち 町家と暮らしを
探る
令和5年2月刊行

発行 御所中心市街地地区街なみ環境整備事業地区協議会
編集 御所市教育委員会事務局文化財課
監修 藤田盟児
絵 北橋幸乃

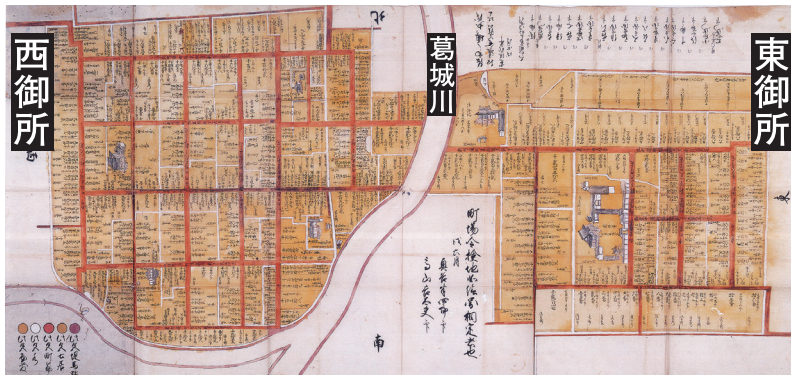
お問合せ 御所市まちづくり推進課(協議会事務局)
住所: 奈良県御所市1番地の3

地方都市として 発展した御所まち



葛城川を挟んで西と東で、2つの町並みが広がる御所まち。家々の間に流れる水路（背割下水）や道路は、江戸時代に初代御所藩主の桑山元晴によって整備されました。

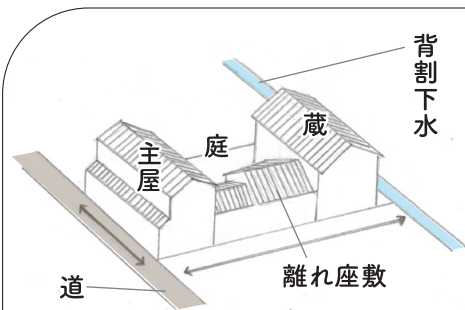
江戸時代を通して薬や大和絣などの商品生産が発展した御所まちは、商工業者が多く暮らす地方都市として栄えました。御所まちのような町人が暮らす都市型の民家を町家と呼びます。



※1742年の検地絵図。町割りや水路など今と変わらない姿が描かれている。

商業町の西御所と寺内町の東御所

町家の敷地構成



※背割下水…建物の背後を流れる下水。豊臣秀吉による大坂のまちづくりでも採用された。

町家の敷地は、間口が狭く、奥行きが深い、いわゆる「うなぎの寝床」です。御所まちの間口は他の地域よりは広めで、建物の規模も大きめです。

道路に面して主屋を置き、奥に庭と一体になった離れ座敷が続く。一番奥には、背割下水に沿った蔵が建つ。これが御所まちの基本的な敷地構成になります。

御所まちの町家の魅力は 一体どこにあるのでしょうか？



長年御所まちの調査に携わってこられた藤田先生のお話を聞きながら、いくつかの町家の魅力を探ってみましょう！



藤田盟児 先生（奈良女子大学教授）
東京大学工学部建築学科卒業。一級建築士。奈良文化財研究所、広島国際大学などを経て、現職。専門は中世の住宅史。共著本に『和室礼賛』（晶文社）など。

古い建物のおもしろさは 昔の人と対話ができること

様式や地方性など、古民家には建築史的な面白さがあります。

しかし一番大切なことは、その家に暮らした人々の考え方を知ることです。古民家の知識があると、その家の面白さが分かり、そこに暮らした人のこだわりや想いに気づくことができます。すると、現代に暮らす私たちも古い建物に愛着や誇りを持つようになります。その誇りが未来に繋げようという想いになり、その想いによって町並みはずっと残っていくのです。

この本では、昔の人が家に込めた想いを感じていただけるように、当時の人々の暮らしに寄り添ってお話していきます。

point 1 丸太を使った御所天井

大和棟のような茅葺の天井裏は、防火や耐熱のために土を葺くので非常に重く、その重さに耐えるために、天井板を細い根太と太い丸太で支えました。この丸太天井は御所まちでしか見られないので、「御所天井」と呼んでいます。



赤塚家 西御所

年代：1750年頃

(江戸時代中頃)

赤塚家は御所まちで一番古い町家。瓦屋根の上には銅板の屋根。この銅板をはがすと、茅葺きの屋根が現れます。このように瓦葺と茅葺が二段になった屋根形式が大和棟です。



御所まちに現存する大和棟は2軒だけ

大和棟のルーツを探る

建築史では、裕福な「農家」特有のものとされている大和棟ですが、なぜ地方都市の御所まちで見られるのでしょうか。

大和棟の別称は高塀造り。高塀は茅葺の屋根の両側に付属する妻壁のことで、その妻壁を塀に見立てたことからその名がつきました。ちなみに、この高塀は、富や格式の高さを象徴するうだつとも呼ばれています。「うだつがあがらない」のうだつですね。

高塀造りは、室町時代の京都の上層商人の町家の特徴です。応仁の乱の頃、京都の人たちは、戦火に包まれた京都から奈良

に避難し、避難先で高塀造りの町家を建てたと考えられます。戦国時代・江戸時代を通して、この高塀造りが奈良の町家に浸透し、江戸時代後半になると、商人が暮らす立派な高塀造りを見た農家の人たちが真似をした。これが大和棟の変遷であると考えます。

つまり、大和棟の原型は京都の高塀造りであり、赤塚家はまさしく京都ルーツの高塀造りの町家です。大和棟は町家から発展したのでは？と考えていましたが、赤塚家を見て「やっぱり大和棟って町家から始まったんだ！」と確信しました。

2 御所天井はまちのひとのこだわり

御所まちにおける1800年代前半までの町家は、元は大和棟で、瓦葺に変える際にツシ2階建てに改造されたものです。瓦葺にすると、梁から吊るすだけの釣り天井に変えそうなものですが、御所まちの人は昔から伝わるこの天井が良いと思って、そのままにしています。先祖から伝わった暮らしを大事に残していく。御所天井は当時住んでいた人の家に対するこだわりの現れです。

吉村家 西御所

年代：1830年

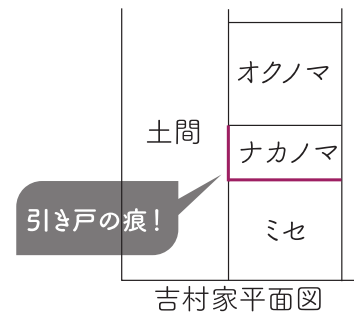
(江戸時代後半)

三角形の妻壁が印象的な妻入の町家で、平入中心の御所まちでは非常に珍しいです。



中に入ると土間に沿って3室の部屋が並びます。吉村家は江戸時代に商売をしていたので、商売屋らしい雰囲気が残ります。一番手前は商売をする部屋のミセです。2室目は家の人の玄関となるナカノマと呼ばれますが、ミセは土間境に引き戸がなく、ナカノマは引き戸の痕が残っています。建具を入れることで、店と居住空間を分けていました。

染める作業場だったので、と思ったのですが、残念ながらそうだった言い伝えはないようです。薬や着物物、雑貨などいろいろな小売業を営んでいたようなので、商品を吊るしていたのでしょうか。このように、吉村家は商売の利便性を考えながらいろいろな試みを施した町家です。



point 1 つながらない梁の謎

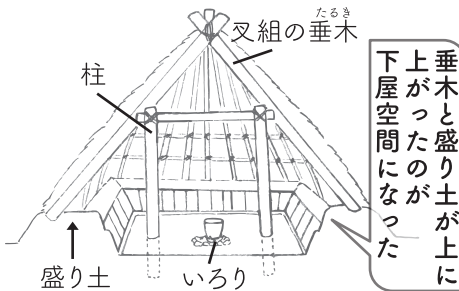
畳がある空間が上屋、天井が斜面になった空間が下屋です。下屋は縁側や押入れとして使われます。下屋空間を見てみると上屋の柱から下屋の壁をつなぐ梁がありません。



伝統と利便性が合体したミセ

2 縄文時代の 竪穴住居と同じ軸組

実はこの空間は竪穴住居と同じ軸組です。下屋へのつなぎ梁が付くのは近代になってから。このつながらない梁は、民家が竪穴住居が発展した家であることの証拠です。



point 町家に根付いた待庵

京都の妙喜庵に利休が作った待庵が残っていますが、現在、さくら茶屋の縁側のようにになっている空間は、まさしく待庵です。天井の形や粘土と藁が混ざった渋く自然らしい荒壁は、待庵の特徴と一致します。この待庵の様式が町家にも使われているのは、庶民の生活の中に数寄屋が根付いていた証拠です。



江戸時代には、武士を頂点とした厳しい身分制が存在しました。身分制によって抑圧された庶民は、戦国の茶人たちが作り上げた平等な空間に共感を覚え、自分の家にも取り入れたのでしょう。

表側の部屋は、丸い母屋と丸い垂木で組まれた掛込天井(平天井と片流れ天井を組み合わせた天井)です。柱を四角にしないのは、格式ばった雰囲気を嫌ったからです。

さくら茶屋 西御所

年代：1900年頃
(明治時代前半)

3つの家を1棟にした明治時代のツシ2階建ての長屋です。改装して現在はカフェとして営業しています。



店名が「さくら茶屋」とのことですので、茶室空間に注目してお話します。

客間を古くより座敷と呼びます。畳を敷き詰め天井を水平にした座敷は、皆が平等に座れる空間で、鎌倉時代に生まれた武士の文化です。平安時代は座る場所が身分によって決まっていたので、武士は建物の上にすらも上げてもらえず地面に座らされました。こうした身分差から解放されたいという想いから、座敷は生まれしました。座敷は車座(くるまざ)になって座われるように八畳が基本です。これは上座も下座もない平等な人間関係を空間として表しています。

さくら茶屋は奥側の部屋

が八畳で、床の間をつけた座敷らしい空間です。

茶室は、座敷同様に日本人が好む平等な空間に、戦国時代の茶人が持っていた侘びさびを取り入れた空間です。茶室の意匠を取り入れた部屋を数寄屋(すきや)といいます。数寄者(風流な人)が好みに任せて作った家という意味です。江戸時代の庶民が目指したものは数寄屋です。

数寄屋の原型は、千利休が作った待庵(まちあん)です。待庵は掛込天井と二畳の極小空間で構成されます。入口が狭いのが特徴で、どの身分の人も頭を下げて入室しなければなりません。これが利休の考える平等な精神性でした。

茶室に込めた思いを探る

梅本家 東御所

年代：1700年代後半
(江戸時代中頃)

元は江戸時代に建てられた大和棟でしたが、明治時代前半にツシ2階建てに改造されました。ツシ2階とは、天井の低い2階空間のことです。



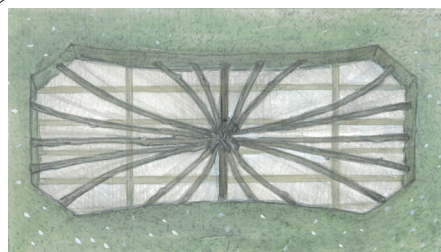
江戸幕府は庶民の家に規定を設け、2階に住むことを禁じました。理由は2階から攻撃されないためです。で、窓は明かり取り程度の虫籠窓で、ツシ2階は物置として使われました。明治になると封建制度から解放され、2階の高さの制限もなくなります。この時代の建物の装飾を見ると、抑圧された息苦しさから解放された人たちの喜びを感じます。

デザイン性に富んだ明治らしい雰囲気です。ツシ2階と立派な虫籠窓、外観だけでは明治時代に見える梅本家ですが、内観を観察すると江戸時代の要素が確認できます。まず、大和棟の名残りである御所天井(4頁参照)が残っていること。次に、時代の指標である柱の面(次頁参照)の広さが、江戸時代のものであることです。

これらの要素を見て、江戸時代に建てられた大和棟の町家だと判断できるわけです。

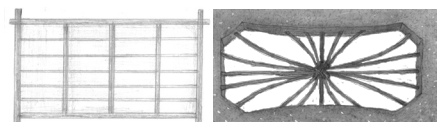
point 暮らしした人の趣味を感じる建具

1階の和室は、数寄屋の意匠が散りばめられています。梅柄の掛け障子に茶道具の模様の板欄間は、その家の人の趣味を感じます。このような建具は全てこの世界でたったひとつの特注品です。建具の意匠を見て、茶が好きな風流な人が暮らしていたんだなあ…と昔の人を偲ぶわけです。



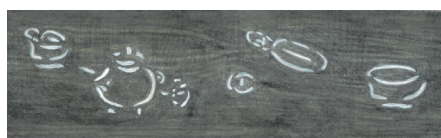
◀梅柄をあしらった下地窓に障子を掛ける掛け障子

障子を外すと風通しが良くなります。昔の人は自分たちが暮らしやすいように、建具にもこだわっています。



◀茶道具の模様の板欄間

趣味の茶を意識してオーダーしたものです。細工の繊細さにも当時の職人の技量の高さを感じられます。



町家の豆知識 一柱の面

柱の角を削り取ることを、面取りと呼びます。この柱の面の広さは、建物の時代を推測する指標となり、面が広ければ古いほど古いことが分かります。

平安時代の建物は殆ど丸柱でした。昔の人は自然を大事にしましたから、自然木に近い丸柱を好みました。時代が下るにつれ、柱が四角に近づいていきます。江戸時代は丸柱の名残りです。



梅本家の柱と面

point 1 季節に関わる縁側の欄間

縁側に巡らされた欄間の彫刻は、四季をモチーフにしています。離れ座敷に入ると春夏秋冬の季節の巡りを一瞬にして見ることができます。自然に囲まれた空間は昔から日本人の憧れです。



2 数寄者ならではの家づくり

離れ座敷から梅型の窓がある廊下を渡ると、にじり口付きの2畳の茶室が現れます。奥に進むにつれて様々な顔の部屋が現れる中尾家は、非常に数寄者らしい家づくりです。

中尾家 東御所

年代：1912年

(大正時代)

梅本家の隣の中尾家は、梅本さんのおじい様が、大正時代に建てた別棟です。ここはかなり茶室に力をいれています。おじい様は相当な数寄者だったのでしょう。



離れ座敷文化を探る

御所まちにきて、最初に感動したのが離れ座敷の立派さです。主屋の奥の渡り廊下を通ると、現れる離れ座敷。これは御所だけの文化です。

御所まちの人は離れ座敷にお客さんを招いておもてなしをしました。一般的に座敷は、主屋の中に客間として作るもので、わざわざ別棟を設けることはありません。それが御所まちには当たり前のように、離れ座敷がありました。江戸時代の御所まちは豊かであったと想像されます。中尾家の離れ座敷は、自然木らしく加工した床柱や季節をモチーフとした欄間など自然を意識した空間になっています。さら

に、座敷から庭を眺めると庭木や灯籠、梅型の窓ガラスなど風情ある風景が広がります。その風景を観ながら、お客さんと一句読んで遊んだり…そうした様子がイメージできます。お客さんをもてなそうという江戸時代の御所まちの人の暮らしと心意気が離れ座敷には、残っている。こういうことから学べるものがありますよね。

建築には建てた人の営みや思いが形になって残っています。建物に残る痕跡を辿り、昔の人と対話する。昔の人の感性に共感して残そうと思う。そうやって古い建物は残されていくのです。

point 1 アール・デコの装飾

中に入ると、正方形の色タイルが貼られた円柱や市松模様の床タイルが目につきます。このような幾何学的な直線が描く装飾をアール・デコといいます。アール・デコは大正14年(1925)のパリ万博(通称アール・デコ博)で紹介され、一世を風靡しました。



2 アール・ヌーボーの装飾

鏡の横に取りつけられた棚はユリをモチーフにしています。花や植物などを装飾的かつ繊細に表現するのは、アール・ヌーボーの特徴です。アール・ヌーボーはジャポニズムの影響を受け、19世紀末に西洋で大流行しました。

旧高島理容室 西御所

年代:1900年代前半

(明治時代後半)

昔は美容室としてまちの人たちの生活に溶け込んでいましたが、今は空き家となっています。



この町家は、近所に住む野阪さんの貸家です。元は居住用の建物でしたが、1940年頃に野阪操さん(現所有者のおばあ様)が、理容師の高島さんのために理容室に改造しました。ハイカラな人として有名なだった操さんが、当時の最新の流行を取り入れて改造したそうで、外観も内観も非常におしゃれになっています。

また、室内には、19世紀末ごろから1940年にかけて西洋で流行したデザインを取り入れられています。まさしく大正から昭和にかけてのデザインの標本と言える町家です。

近代町家の流行を探る